

研究報告

初回基礎看護学実習における学生の目標到達に対する 自己評価と満足感との関連

近藤 裕子

徳島大学医学部保健学科

要旨 次年度からの実習指導の一助とすることをめざし、A看護系大学1年生60名を対象に、初回基礎看護学実習における目標到達と満足感に関する自己評価を、5段階尺度で実施した。

学生の自己評価からは、6割の者が実習に満足感をもったと回答していた。実習目標への到達と実習の満足感との関連をみると、看護方式における役割や、患者の入院環境を既習の看護理論を用いて分析・考察する、さらに目的の明確化や目標到達への努力の有無が満足感に関連していた。この結果をふまえて、教員は、学生に対し、実習目的・目標について十分に理解できるような説明や方法を考慮することや、批判的思考力の育成、さらに実習への関心や興味を強化できるような支援の重要性が示唆された。

キーワード：看護学生 初回基礎看護学実習 自己評価 目標到達 満足感

はじめに

教育を実施する上で、学生が科目内容や方法に興味・関心を示し、最終的に満足感を得て学習を終了できることは重要なことである。それは学習への動機づけとなり、さらには学生にその科目への期待を抱かせる一助となる。教員は、学生の興味・関心をいかに引きだすか、学生をどう動機づけるか、学生の満足感を高めるにはどのような支援ができるのかについて、継続して検討することは重要と考える。

臨地実習においても同様のことがいえる。しかし、看護学生の中には、臨地実習に関心を示さない者も多く見られるようになってきている。この要因としては、看護を志向していない、対人関係がうまく結ばない、さらには、実習場で看護を志すのを中断するような出来事に遭遇した、などが考えられる。

臨地実習において教員は、学生を動機づけ、満足の高い実習を行うには、どのような支援をする必要があるの

であろうか。先行研究においては、学生への動機づけに関しては、臨床場面からの分析¹⁾や、教員との関わりの場面における分析²⁾などが行われている。一方、実習における満足感³⁻⁷⁾や学生がもつ困惑や困難⁸⁾、学生の自己評価からみた学習成果⁹⁻¹⁰⁾などからは、教員が学生をどのように支援するかについての課題が示されている。しかし、臨地実習における学生の自己評価と、満足感との関連についての先行研究は見あたらない。

今回、初回基礎看護学実習において、看護学生が目標にどの程度到達したか否かを、評価表に基づいて自己評価させた。学生の自己評価の結果と、学生の実習に対する満足度の程度を比較し、学生が満足感をもつには、学生をどう支援したらよいかについて検討した。

目 的

次年度の実習指導の一助とするために、初回基礎看護学実習で学生が実施した自己評価から、目標到達と満足感の程度、およびそれらの関連を検討し、学生への支援のあり方を明らかにする。

2006年7月18日受付

2006年9月1日受理

別刷請求先：近藤裕子，〒770-8509 徳島市蔵本町3-18-15
徳島大学医学部保健学科

方 法

1. 対象

A看護系大学1年生で、2005年度開講の基礎看護学実習を受講した79人のうち、研究に承諾の得られた60人(75.9%)である。

2. 期間

2005年9月開講の基礎看護学実習開始から終了後2週間までとした。

3. データ収集方法

実習終了日に、実習の7目標に実習に臨む姿勢や態度を加えた、30項目の細目標を設定し、到達度について5段階による学生自身の評価を実施した。

行動目標についての評価基準は、「到達できた」を5とし、「まあ到達できた」を4、「どちらともいえない」を3、「あまり到達できなかった」を2、「到達できなかった」を1とした。実習に対する満足感の評価基準は、「非常に満足である」を5とし、「満足である」を4、「どちらともいえない」を3、「あまり満足していない」を2、「全く満足していない」を1とした。

4. 分析

目標到達への評価および満足感に関する分析は、項目別に単純集計し、人数と百分率を算出した。その後、目標への到達基準の「到達できた」と「まあ到達できた」を「到達できた」とし、「どちらともいえない」はそのまま、「あまり到達できなかった」と「到達できなかった」を「到達できなかった」に3区分して、人数と百分率を算出した。さらに、目標到達と満足感との間でSpearmanの順位相関係数を求め関連をみた。

5. 倫理的配慮

学生には、調査の目的、調査内容と成績は無関係であること、プライバシーを守ること、拒否しても不利益を被らないこと、公表の是非について説明し、承諾を得た。

初回基礎看護学実習の概要

初回基礎看護学実習は、1年次9月に1週間病棟実習を行い、看護学概論で学習した知識を臨床の場で統合する科目として位置づけられている。学生は入学後から7

月までに学習する看護学概論1単位(30時間)の内容、特に入院患者の生活環境や、看護活動の実施場面を観察し、ナイチンゲールやヘンダーソンの看護論を用いてクリティークし、看護についての学習を深めることを目的としている。

学生には目標として、①入院患者の生活環境の実態把握、②医療チームメンバーの各々の役割とメンバー間の連携のあり方、③医療チームにおける看護師の位置・役割、④看護活動についての説明、⑤ナイチンゲール、ヘンダーソンの概念モデルを比較照合資料として、入院患者の環境・健康・看護とそれらの関連について、⑥今後学習する科目の学習の必要性、⑦自己の興味・関心を持つ課題を探索する、の7目標を明示している。

学生は、1週間の実習期間中に目標到達できるように、事前・事後学習やグループ討論などの学習を行いながら、実習に臨んでいる。実習までに終了している科目は、共通教育科目の一部と、ボランティア論や保健学概論、介護実習、形態機能論の一部である。その他に専門科目としては看護学概論の科目が終了している。

結 果

看護学生の実習に対する満足感は、「非常に満足である」と回答した者は25名(41.7%)、「満足である」は16名(26.7%)、「どちらともいえない」の回答は11名(18.3%)、「あまり満足していない」は7名(11.7%)、「全く満足していない」と回答した者は1名(1.6%)であった(表1)。

学生の目標到達をみたのが表2である。30項目中60%以上の学生が「到達した」と回答した項目は25項目であった。その中で90%以上の学生が到達したと回答した項目は、患者の外的環境が把握できる(96.6%)、病棟における看護師の業務を説明できる(93.3%)、目標到達に努力できる(93.3%)、看護の場に対して関心を示す(95.0%)、丁寧な言葉遣いができる(91.7%)、清潔な

表1 看護学生の実習に対する満足度の割合
n=60

評 価 基 準	人 (%)
非常に満足である	25 (41.7)
満足である	16 (26.7)
どちらともいえない	11 (18.3)
あまり満足していない	7 (11.7)
全く満足していない	1 (1.6)

表2 看護学生の自己評価による目標到達割合

目 標	評 価 項 目	n=60 人 (%)			
		評 価 基 準	到達 できた	どちらとも いえない	到達でき なかった
①患者の生活環境の把握	患者の外的環境が把握できる		58(96.6)	0(0.0)	2(3.3)
	患者の心理状態について把握できる		36(60.0)	19(31.7)	5(8.3)
	患者が生活する場としての環境を把握できる		53(88.3)	6(10.0)	1(1.6)
	治療・看護を受ける場としての環境を把握できる		45(75.0)	9(15.0)	6(10.0)
②チームメンバーの役割と連携	医療チームメンバーの職種と役割が分かる		46(76.6)	10(16.7)	4(6.7)
	医療チームの連携の方法を説明できる		41(68.3)	12(20.0)	7(11.7)
③④看護師の位置・役割、看護活動内容	病棟における看護師の業務を説明できる		56(93.3)	3(5.0)	1(1.6)
	職位別役割が分かる		45(75.0)	9(15.0)	6(10.0)
	看護方式とその中における役割を説明できる		45(75.0)	14(23.4)	1(1.6)
	病棟における特殊なケアについて分かる		35(58.4)	17(28.3)	8(13.3)
⑤理論との照合・分析	療養の場や環境と、既習の看護理論と照合できる		42(70.0)	13(21.7)	5(8.3)
	療養の場や環境を、既習の看護理論を用いて分析・考察できる		33(55.0)	22(36.7)	5(8.3)
⑥学習の必要性	既習の学習内容の復習の必要性が分かる		42(70.0)	16(26.7)	2(3.3)
	今後の学習の必要性が説明できる		53(88.3)	6(10.0)	1(1.6)
⑦課題の明確化	自己の課題が明確にできる		45(75.0)	14(23.4)	1(1.6)
	自己の課題内容の理由を説明できる		32(53.4)	23(38.3)	5(8.3)
	課題達成に向けた方法をあげる		23(38.3)	29(48.3)	8(13.3)
⑧実習に臨む姿勢	実習前	実習目的が明確化できる	52(86.7)	7(11.7)	1(1.6)
		グループにおける役割がとれる	46(76.6)	14(23.4)	0(0.0)
		グループで積極的、建設的に意見をのべる	48(80.0)	11(18.4)	1(1.6)
		事前学習ができる	46(76.6)	10(16.7)	4(6.7)
	実習中	目標到達に向けた行動ができる	49(81.7)	10(16.7)	1(1.6)
		目標到達に努力できる	56(93.3)	4(6.7)	0(0.0)
		看護の場に対して関心を示す	57(95.0)	3(5.0)	0(0.0)
		丁寧な言葉遣いができる	55(91.7)	5(8.3)	0(0.0)
		清潔な服装ができる	55(91.7)	3(5.0)	2(3.3)
	実習後	実習終了後、グループで積極的、建設的に意見をのべる	53(88.3)	7(11.7)	0(0.0)
グループでのまとめに努力できる		57(95.0)	3(5.0)	0(0.0)	
発表・質疑に積極的に関わる		21(35.0)	23(38.3)	16(26.7)	
個人レポートが課題通り作成できる		43(71.6)	14(23.4)	3(5.0)	

注) 評価項目は目標ごとの細目標

表3 看護学生の実習に対する満足度と自己評価得点との相関

評 価 項 目	Spearman の順位相関係数 (r)
看護方式と其中における役割を説明できる	0.328 *
療養の場や環境と、既習の看護理論と照合できる	0.355 *
実習目的が明確化できる	0.315 **
目標到達に努力できる	0.314 *

* p<0.05

** p<0.01

服装ができる (91.7%)、グループのまとめに努力できる (95.0%) であった。到達したと回答した学生が60%以下の項目は、病棟における特殊なケアについて分かる (58.4%)、療養の場や環境を、既習の看護理論を用い

て分析・考察できる (55.0%)、自己の課題内容の理由を説明できる (53.4%)、課題達成に向けた方法をあげる (38.3%)、発表・質疑に積極的に関わる (35.0%) の5項目であった。目標到達と満足度との間における相関を Spearman 順位相関でみた。その結果、看護方式と其中における役割を説明できる (r=0.328, p<0.05)、療養の場や環境と、既習の看護理論と照合できる (r=0.355, p<0.05)、実習目的が明確化できる (r=0.315, p<0.01)、目標到達に努力できる (r=0.314, p<0.05) の項目間で相関を認めた (表3)。

考 察

看護学生が意欲的に実習に臨むには、実習への動機づけや、実習に関する満足感がもてるように教員が支援することが重要となる。

初回基礎看護学実習において、学生の自己評価から目標到達をみると、この実習の目的とする看護の役割機能の一部や、入院患者の生活環境への理解については、目標到達にむけた努力の結果が現れている。しかし、既習の理論との照合・分析や、さらに自己の課題の明確化とその方法、発表・質疑などへの積極的な関わりについては、目標到達への割合が低い。

このことは、学生は入院患者の環境や看護師の活動内容を把握しようとしているものの、観察した内容の分析に困難をきたしているものと考えられる。これは学生の分析力や批判的思考力が、未だ十分に育成されていない状態であると判断できる。学生はたくさんの情報を収集しているが、それらをどのように収束するか能力が十分でないと考えられる。今後教員は、学生の思考力を向上するような問いかけ、情報を収束する思考や分析について、指導していくことが重要である。

次に、学生の満足度の程度と目標到達との関連では、前述した項目と同様、看護の役割機能や既習の理論との照合・分析などの、目標到達と満足度が影響し合っている。さらに実習に臨んで実習目的を明確化できていたか否かや、目標到達への努力を行ったか否かが満足度と関連している。目標到達に向けては、個々の学生が努力していると観察できた。しかし、学生は、もう少し努力したらもっと満足いく実習ができたのではないかと考えているようだ。実習に対する自己評価による満足度と目標到達との関連から、実習の目的・目標を十分に理解させることと、実習場で何を目的として実習することが求められているかを、折に触れて学生に想起させながら実習に臨ませること、さらに学生の批判的思考力が向上するような支援の必要性が示唆された。

以上の結果を踏まえ、次年度から学生に対するよりきめ細かなオリエンテーションと、実習期間中は学生には必要に応じて目標想起させることと、目標への到達レベルを評価させながら実習を遂行していき、学生が満足していく実習を体験でき、目標到達がはかれるように計画していきたいと考えている。

結 論

初回基礎看護学実習において、学生が自己評価した目標達成と満足度との関連を分析し、以下の事が明らかとなった。

1. 初回基礎看護学実習に対して6割の学生は、満足であると回答していた。
2. 実習に対する満足度と目標到達との関連では、看護方式の中における役割や、入院患者の生活の場や環境を既習の看護理論をもちいて分析・考察することについて、さらに目的の明確化や目標到達への努力の程度が満足度に影響していた。

学生が実習に積極的に取り組み、満足度をもって実習を行うために教員は、学生全員が実習目的・目標について理解し、学生の実習への関心や興味を強化できるような支援や、実習の期間を通して目標到達できるように、また思考力育成にむけた支援が重要である。

文 献

- 1) 秋元典子, 森本美智子, 森恵子: 看護への動機づけを促進する臨床実習の方法, *Quality Nursing*, 10(8), 783-794, 2004.
- 2) 中村良美: 臨床実習における教員の関わりと学生の経験一場面の再構成を通して, 神奈川県立看護教育大学看護教育研究集録, 28, 125-131, 2003.
- 3) 片山由美, 奥津文子: 臨地実習目標達成度評価と実習満足度との関連—学生の満足度を組み入れた臨地実習目標達成度評価の一考察, 京都大学医療技術短期大学部紀要, 23, 33-42, 2003.
- 4) 北林司, 矢嶋和江, 秋山美香 他: 成人看護学実習における看護学生の満足感を構成する要素の分析, 群馬パース学園短期大学紀要, 6(1), 21-27, 2004.
- 5) 高橋清美, 中野榮子: 学生が抱く早期看護実習Ⅰの主観的満足度—内発的動機づけによる実習効果, 福岡県立大学看護学部紀要, 1(1), 29-39, 2003.
- 6) 大森裕子: 小児看護学実習における学生の満足度に及ぼす影響, 大阪府立看護大学医療技術短期大学部紀要, 8, 73-77, 2003.
- 7) 岡本佐智子, 長谷川真美, 今川詢子 他: 周手術期看護実習における意欲に関する要因—満足感・達成感・自己効力感実習のイメージからの分析, 看護教育, 42(8), 718-723, 2001.

- 8) 西田みゆき, 北島靖子: 小児看護実習における学生の困惑感, 順天堂医療短期大学紀要, 14, 44-52, 2003.
- 9) 小口多美子, 関美知代, 吉村由起 他: 小児看護学実習に於いて学生が直面する困惑, 第33回日本看護学会論文集 (小児看護), 148-150, 2003.
- 10) 石原和子, 松本麻里, 岡田純也 他: 内科治療領域における臨地実習の展開と学生による自己評価, 長崎大学医学部保健学科紀要, 14(2), 107-114, 2001.

The relationship between self-assessment and satisfaction regarding goal attainment of students in initial basic practical training in nursing

Hiroko Kondo

Major in Nursing, School of Health Sciences, The University of Tokushima, Tokushima, Japan

Abstract In order to provide an aid to practical training guidance starting next year, self-assessment using a 5-level scale was conducted regarding goal attainment and satisfaction in initial basic practical training in nursing, taking as subjects 60 first year students at Nursing University A.

In self-assessment, 60% of the students responded that they were satisfied with practical training. Looking at the relationship between attainment of practical training goals and satisfaction with practical training, satisfaction was found to be related to analysis and discussion of the patient hospitalization environment and the role in the nursing system using already studied nursing theory, and to clarification of purposes, and work to achieve goals. These results suggest that instructors should consider explanations and methods which enable students to adequately understand the purposes/goals of practical training, and should provide support to develop critical thinking skills and further strengthen concern with and interest in practical training.

Key words : nursing student, initial basic practical training in nursing, self-assessment, attainment of practical training goals, satisfaction